

事業報告書

I. 事業の概要

公益法人として第4期となる平成27年度は、

1. 奨学金事業として

(1) 県内在住19名の高校奨学生及び大学院奨学生に対し、奨学金を給付した。

(2) 奨学生同志の交流を深めるため懇親会を2回開催した。□

(3) 日本の古典文化に触れる機会として、奨学生を対象に仏像鑑賞を行った。

(4) 池上彰さんの講演会を開催した。

2. 奈良県立橿原考古学研究所へ学術研究の為の書籍を寄贈した。

II. 奨学金事業

1 (1) 本年度は、新採用の5名を含めて計19名の高等学校奨学生に対し月額3万円、1名の大学院奨学生に対し月額10万円の奨学金を給付した。

(2) 懇親会

《第1回》 □

平成27年8月22日開催	在学奨学生 18名	・	卒業生 6名	/	計 24名参加
--------------	-----------	---	--------	---	---------

・恒例の行事に加えて、午後から、興福寺の国宝館及び北円堂の仏像鑑賞を行った。特に、北円堂は特別開扉中であったので、普段目にはすることができない仏像を鑑賞できる良い機会となった。また、今回の話し合いのテーマとしては、「戦争について」とすることに決定。グループに分かれて戦争はなぜ起こるのか？ なくせるのか？ 犠牲について！、悲惨さについて！等々、重たいテーマであったが、皆真剣に話し合った。

《第2回》

平成28年3月26日開催	在学奨学生 18名	・	卒業生 10名	/	計 28名参加
--------------	-----------	---	---------	---	---------

・恒例の行事に加えて、午後からの話し合いについては、テーマを事前に皆で決めておいた。今回は、「スマホについて」、「TwitterやFacebook等のSNSの存在意義について」を話し合った。まさに今という時代を象徴するようなテーマだけに皆それぞれの見解だけでなく体験談等も加わり話の幅が広がったが、それらを使うに当たっては、管理するための知識や能力の必要性については全員再認識する機会となり、有意義な話し合いであったと思われる。

(3) 古典文化に触れる機会としては、
上記のとおり第1回開催の懇親会において仏像鑑賞を行った。

(4) 講演会開催

(ア) 事業の開催状況報告

事業名	公益財団法人修徳会奨学金事業講演会
演題	『これからを生きる君達へ』
講師	池上 彰氏 東京工業大学教授・ジャーナリスト
事業の趣旨	当財団が行っている奨学金事業の対象である県内の高校生に、社会で活躍されている人生の諸先輩の方々のお話を身近に聴くことで、今の自分自身を感じながら、これからの自分を考える機会を提供する。
事業の開催日時	2016（平成28）年3月22日（火） 午後2時開演 午後3時35分終演
場所	奈良弁護士会館3F大会議室（奈良市中筋町22-1）
入場料	全席招待により入場料は無料（募集人数 100名）
当日の入場者数	109名 [内高校生104名、奨学生卒業生5名] その他役員
当日の事業概況	<p>講師は、NHK記者時代から一貫して「社会の出来事を、わかりやすく伝える」というスタンスを持ち続けるフリージャーナリストであり、テレビ出演や新聞雑誌等の執筆活動、大学教授など多方面で活躍している人物である。</p> <p>講演会の対象を高校生に限定したものの、講師の知名度が極めて高かったこともあり、募集定員を満了す応募があった。会場は、希望者で満了され、講師と聴講者との距離が近かったこともあり、終始熱気に包まれていた。</p> <p>講演は、講師の生い立ちやNHKに入社するまでの経緯、記者時代のエピソード、講師が教授を務める大学での講義内容や、アメリカ大統領選挙等社会情勢（ニュース）の捉え方等、多岐にわたる事項に触れながら、これから社会で生きていくために講師が重要と考えていること（若いうちに様々な経験をすることや自ら主体的に考えること等）を織り交ぜて、わかりやすくかつ興味深い語り口で行われた。</p> <p>聴講者は、メモをとる等その態度は極めて真面目で、講演終了後の質疑も活発になされた。講師は、講演直後の電車で奈良を発つ予定であったが、時間の許す限りぎりぎりまで質疑を受け付け全てに回答した。</p> <p>池上さんは、東日本大震災における原発事故についての報道の在り方にジャーナリストとしての使命を感じ、東京工業大学からの教授就任要請に応じられたとのことであった。大学を単に専門的な知識や技術だけの学問の府ではなく、理系の学生達に今という時代に生きている事を認識し、そして、これからを担うための思考や判断力を養ってほしいという強い思いで講義をされているという。そのなかでも、“問われたことから疑え！”というインパクトのあるフレーズには、自分を取り巻く事象に対しては、自分で感じ取り、自身で考える事が求められるのだということが込められている。</p> <p>そして、まさにそのことが当財団の講演会開催の趣旨であることに主催者側として感慨深いものがあった。</p>

- 2 . 奈良県立橿原考古学研究所へ学术研究の為の書籍を寄贈した。
寄贈書籍については、同研究所から購入書籍報告書を受け取っている。